

議案第 16 号

調布市文化財の指定について

上記の議案を提出する。

令和 7 年 3 月 28 日

提出者 調布市教育委員会

教育長 大和田 正 治

提案理由

調布市文化財保護条例第 4 条の規定により，市文化財の指定を行うため，提案するものであります。

調布市文化財の指定について

次の資料を調布市文化財に指定する。

1 文化財の名称

しもいしわらはちまんじんじゃほんでんおよ はいでん つけたり むなふだ
下石原八幡神社本殿及び拝殿 附 棟札 3 枚

2 員数

1 棟

3 指定の種別

調布市指定有形文化財（建造物）

4 所有者

宗教法人 下石原八幡神社

5 所在地

調布市富士見町二丁目 1 番 1 1

6 管理責任者

下石原八幡神社 氏子総代

7 造立年代

本殿 宝永 5 年（1 7 0 8）

拝殿 嘉永元年（1 8 4 8）

8 指定理由等

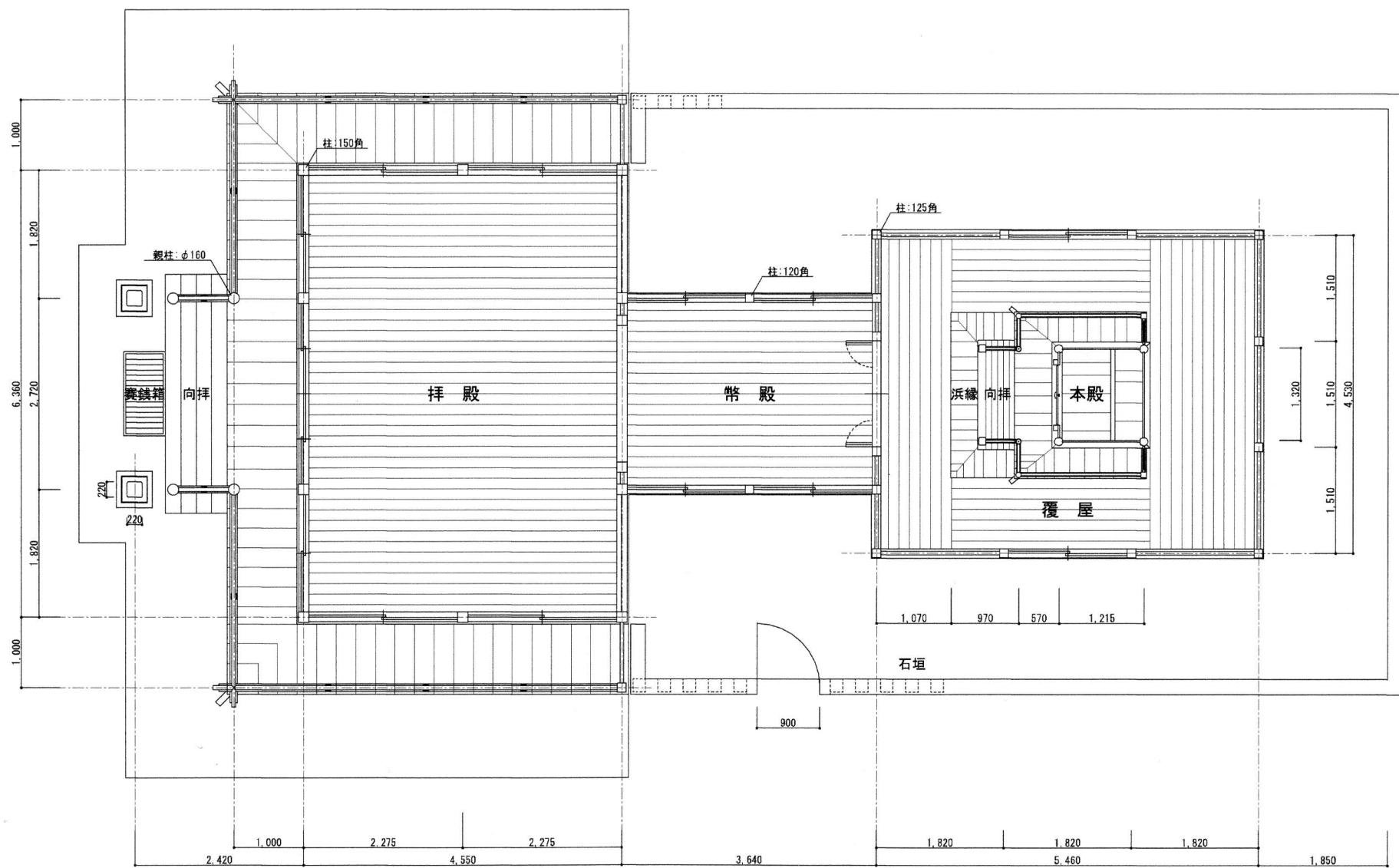
別紙「調布市文化財指定理由説明書」のとおり

調布市文化財指定理由説明書

一．名称	下石原八幡神社本殿及び拝殿 附 棟札三枚
二．指定の種別	有形文化財（建造物）
三．所有者	宗教法人下石原八幡神社
四．所在地	調布市富士見町二丁目一番地一一
五．管理者	下石原八幡神社 氏子総代
六．造立年代	本殿 宝永五年（一七〇八） 拝殿 嘉永元年（一八四八）
七．建立者	本殿 本願 岩沢太兵衛 他 拝殿 名主 太田善右エ門源盛明 他
八．施工者	本殿 山本仁左エ門 横山左五左エ門 拝殿 熊沢吉五郎
九．構造・形式	本殿 一間社流造 柿葺 拝殿 切妻造 平入 向拝向唐破風付 銅板葺
一〇．形状	【規模】 本殿 身舎 桁行一・三二〇m（四・三六尺） 梁間一・二一五m（四尺） 拝殿 桁行六・三七m（三・五間） 梁間四・五五m（二・五間） 【本殿】平面図

本殿は一間社流造で、屋根は柿葺、本殿身舎の正面、両側面に縁を廻し、向拝に五級の階を付け、その正面、両側面に浜縁を施す。身舎の規模は桁行一・三二m（四・三六尺）、梁間一・二一五m（四・〇尺）で、小振りな見世棚造りで、柱の下には土台を回す。拝殿は切妻造、平入で、規模は桁行六・三六〇m（二一尺・三・五間）、梁間四・五五〇m（一五尺・二・五間）で、正面向拝は向唐破風とし、屋根は銅板葺きとする。正面、両側面に縁を廻し、切り目縁とし、両脇に脇障子を入れる。

様式は折衷様で、向拝柱は几帳面付き角柱で、上部に粽を付け、柱上の斗拱は和様の三斗組で復古調の皿斗付き、木鼻は唐様の象鼻で、向拝柱と拝殿は海老虹梁で繋ぐ。向拝柱の繋虹梁と桁の間には割り抜きかえる股を置き、桁の上部には禅宗様の大瓶束を入れて唐破風の棟木を支える。



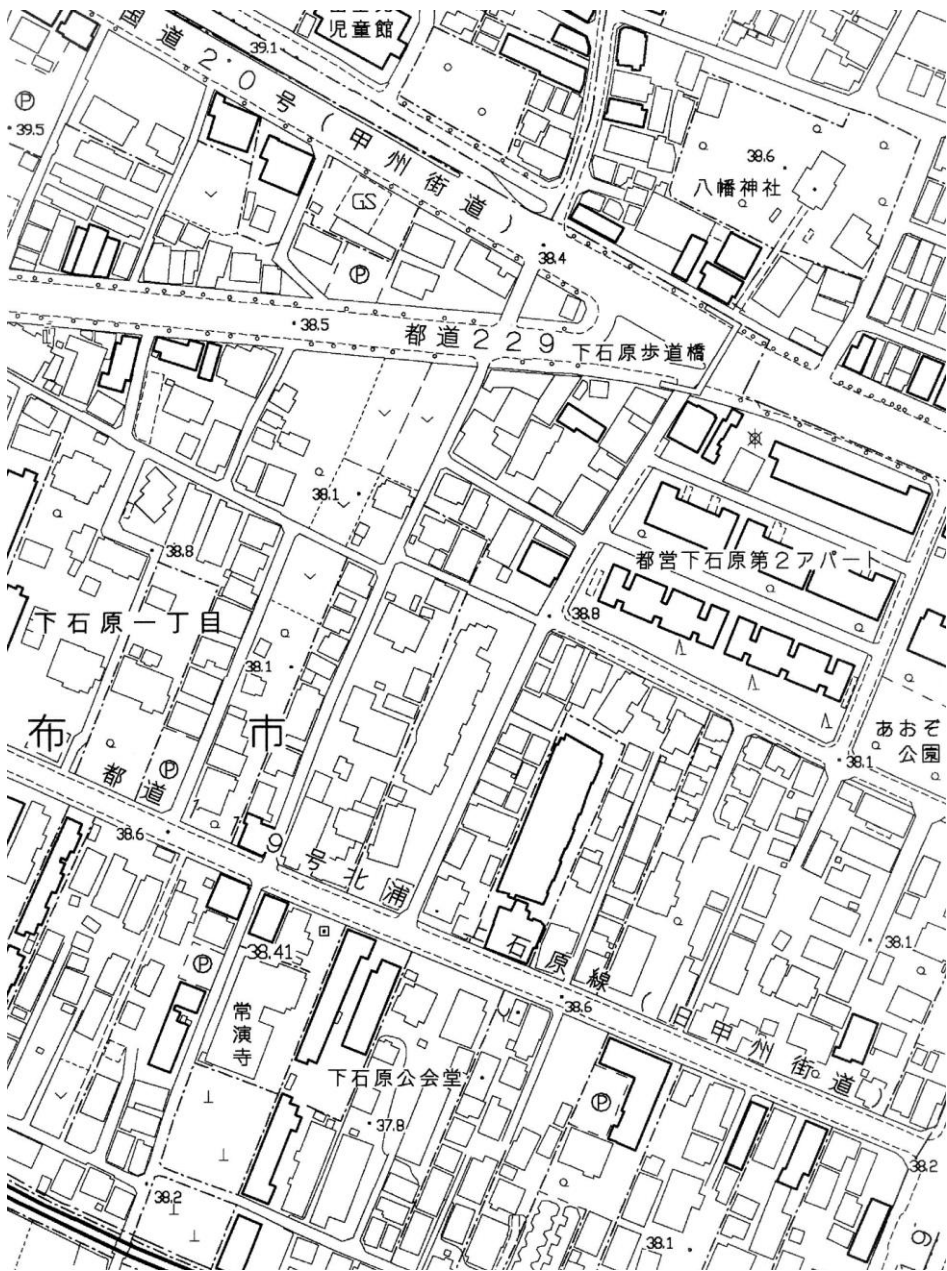
[拝殿及び幣殿・本殿覆屋]平面図

【解説】

下石原八幡神社は、創建年代等是不詳だが、下石原宿の鎮守社で、譽田別命を祭神とする。下石原宿は、江戸時代上石原宿・上下布田宿・国領の四宿と合せて布田五宿と呼ばれていた。しかし、多摩川沿いの府中崖上に集落があった正保年間頃までは町と呼ばれて、集落が移住して、街道が整備された元禄年間頃に宿と称されるようになった。五宿の中でも中心的な役割を持ったのは上布田宿で、その鎮守社である布多天神社は延喜式内社とされる。また、布多天神社は上布田宿、下布田宿、小島分村から国領宿、上ヶ給村、矢ヶ崎村の総鎮守であった。その布多天神社も、かつては府中崖線の縁辺部に祀られていたとされ、古天神と伝えられる跡地（品川道以南、布田五丁目五三辺り）が言い伝えられている。

上石原宿には八幡聖天合社が祀られているが、下石原宿には北側の下飛田給村内に八幡社を建立していた。この村は下石原宿の持添地であったが、民戸は無く、入会地であった。『新編武蔵風土記稿』には、「下飛田給村 神社 八幡社 除地、四反三畝六歩、村の東字裏道にあり、本社四尺の宮造りにて南に向ふ、覆屋二間に二間半、神体は白幣なり、社前に木の鳥居をたてり、下石原宿の鎮守にして例祭年々九月朔日、社地には杉松生い茂れり、鎮守の年代を伝えず、下石原宿常演寺持」とあり、現状の本殿の規模など記述と一致する。

社殿地はやや西に振れているが、ほぼ南面して参道が旧甲州街道まで伸びている。そのほぼ正面に別当寺であった常演寺がある。現在、その参道は国道二〇号により切断されており、歩道橋を渡らないと参拝出来なくなり、かつて旧甲州街道に面して建てられていた石鳥居も二〇号線に面して移されている。この社殿地は、先に述べたように旧下飛田給村内（現富士見町二丁目）にあって無人の地であったが、宿場からも離れた安全な場所であった。



本殿の建立は、棟札（棟札一）によると宝永五年（一七〇八）で、その前年の一二月に富士山が噴火して、その火山灰が関東まで及び、作物の被害も甚大であったにもかかわらず、造営が行われていることから、その上棟はすでに為されていたと思われる。

棟札には「奉修造若宮社」と記されていることから、すでに古社があつて移築されたものと考えられる。なお、その造営の関係者には本願岩沢太兵衛と肝煎青田善右門の二名だけが記されている。

この本殿は、現在、復屋の床の上に安置されているが、当初は土間の玉石の上に据えられていたとみられ、傷んだためであろうか、全て切断されて新材で補修されている。この時に土台も入れられ、床下に切石積みで基礎を高くしている。建立当初、本殿は覆屋も無く建てられていたようで、柱などの部材が風化している。その後、覆屋も建てられたが、拝殿は江戸末期まで建てられなかった。

拝殿が新築されたのは嘉永元年（一八四八）のことであつて、棟札（棟札三）には「奉新造八幡宮拝殿壱宇」と記されていることから、その時期に建立したことは明らかである。

それ以前に本殿が改修されている（棟札二）。改修されたのは寛政九年（一七九七）で、本殿の柿葺きの屋根工事が主であつたようで、その際に向拝、縁廻りの大工工事もされている。本殿身舎部分と彫物の様式が異なっているのは、そのためと推定される。

一二・保存状況	一三・指定理由	一四・指定基準
る。現在、この社殿は氏子の方々によって極めて良く管理されており、旧状が良く留められている。引き続き、文化財建造物として維持管理していくために、埃の除去や木材の乾拭きなどの処置を定期的に行う必要がある。	調布市内に残されている社殿建築としては、虎狛神社本殿（天和三年・一六八三再建）、布多天神社本殿（宝永三年・一七〇六再建）に次いで三番目に古く、江戸時代中期の遺構として貴重な建造物である。そして、その社殿の変遷を裏付けられる史料として、江戸時代中期の棟札が現存していることは、江戸近郊の農村における造営の状況を知ることができる。またこの社は甲州街道の整備に伴って移転、新築されていることも大切である。観察される歴史的史料としても、さらに富士山噴火と同時期に建立されていることから、当時の農村経営の状況を知るうえでも貴重な遺産である。	「調布市文化財指定基準」 一 一 調布市指定有形文化財 一 建造物 （二）歴史的又は学術的価値の高いもの （三）流派的又は地域的特徴において顕著なもの

石鳥居と参道



参道から拝殿正面を望む



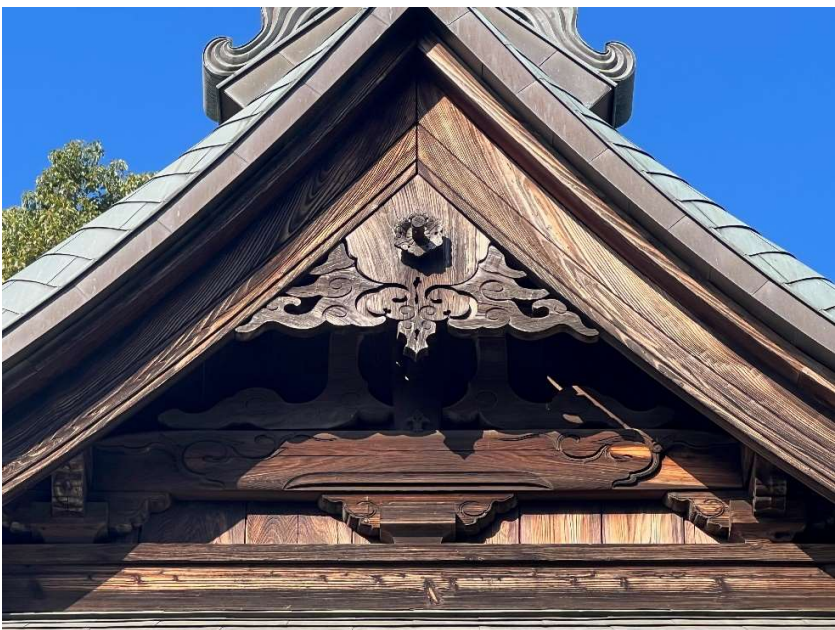
拝殿正面



拝殿向拝唐破風



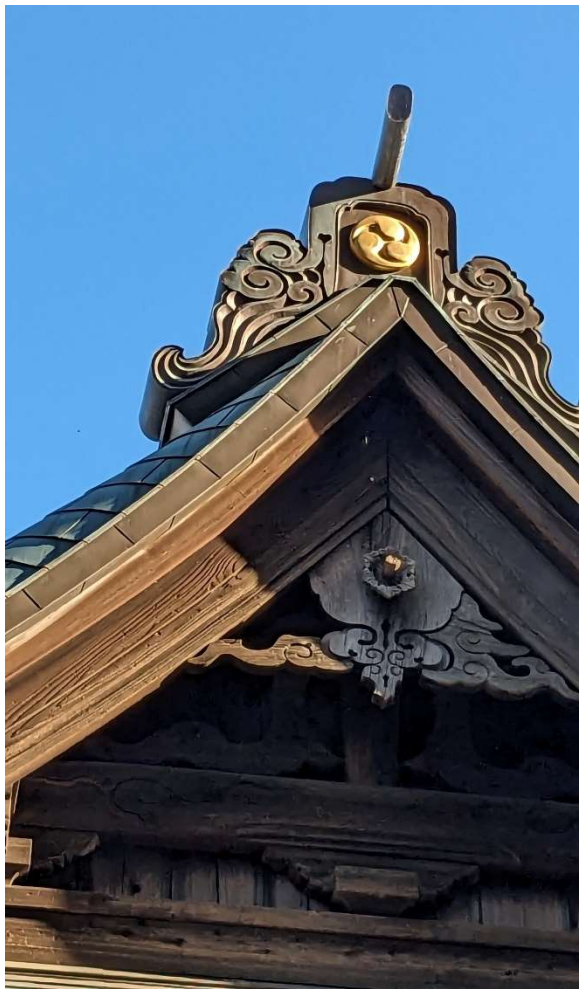
拝殿懸魚・妻虹梁



拝殿 本殿覆屋を望む



拝殿懸魚・妻虹梁



拝殿廻り縁 脇障子



本殿覆屋と幣殿の収まり



本殿覆屋背面



本殿覆屋側面





本殿 背面の収まり



本殿 柿葺き 浜縁
柱 梁 斗 栱 など主要部材は檜造



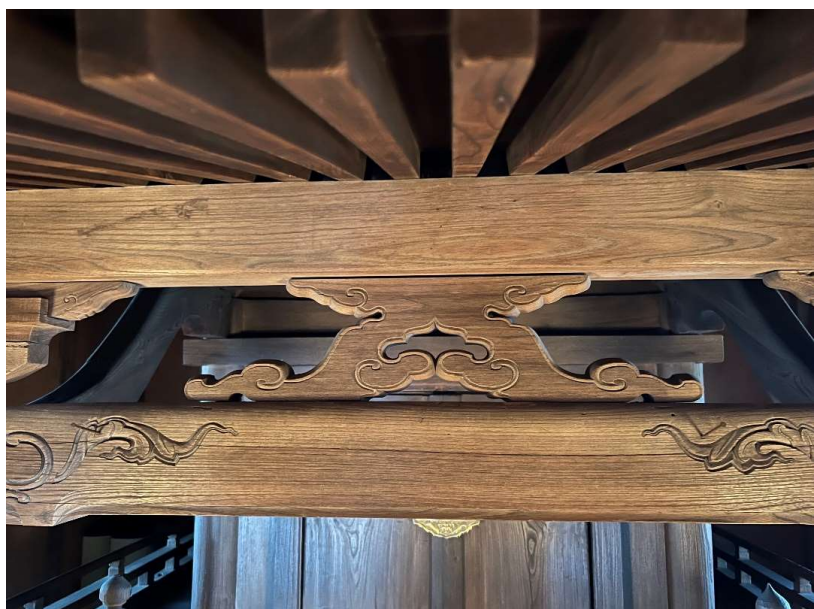
本殿 向拝 軒は二軒 海老虹梁で身舎とらなぐ



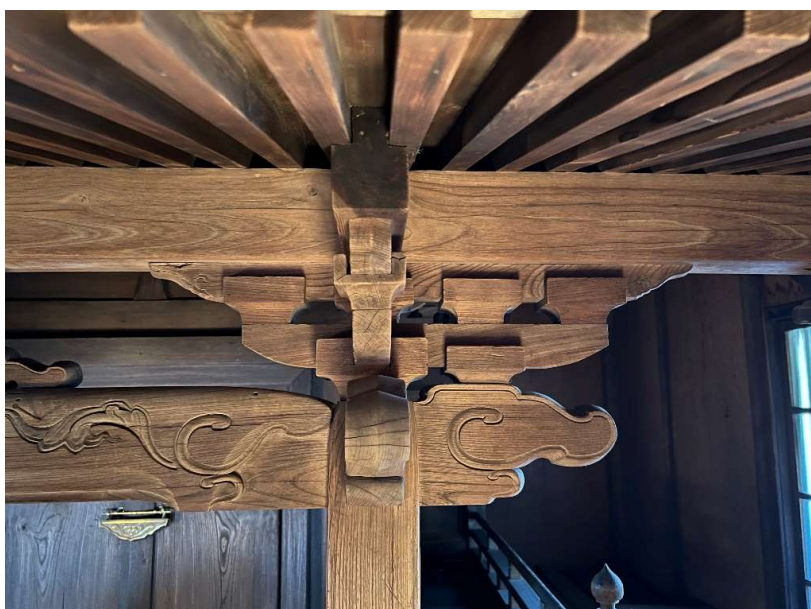
柿葺き屋根の曲線は素晴らしい



本殿向拝 左 柱・水引虹梁・斗拱・木鼻・
軒桁・繁垂木



本殿向拝 中央 剝り抜き墓股



本殿向拝 右 柱・水引虹梁・斗拱・木鼻・
軒桁・茂垂木



猪の目を付けた墓は古風で良出来



本殿破風の妻飾りの収まり

身舎床下の柱は全て根継ぎされて、土台に据えられる



土台は石積み基礎に乗せている



本殿内部に収められていた木製大黒天坐像 高さ 六〇mm
光背を付ける



棟札一 宝永五 一七〇八 総高52.4cm 上巾16.0cm 下巾14.2cm 肩高49.0cm ヒノキ材厚6mm

表



聖主天中天迦陵頻伽聲 于時宝永五戊子歲 別當常演寺

法印栄順代

梵（キリク）奉修造若宮社一字諸願如意成就處

大工

哀愍衆生者我等今敬礼 十月二十三日 本願 岩沢太兵衛 山本仁左門
肝煎 青田善右門 横山佐五左門

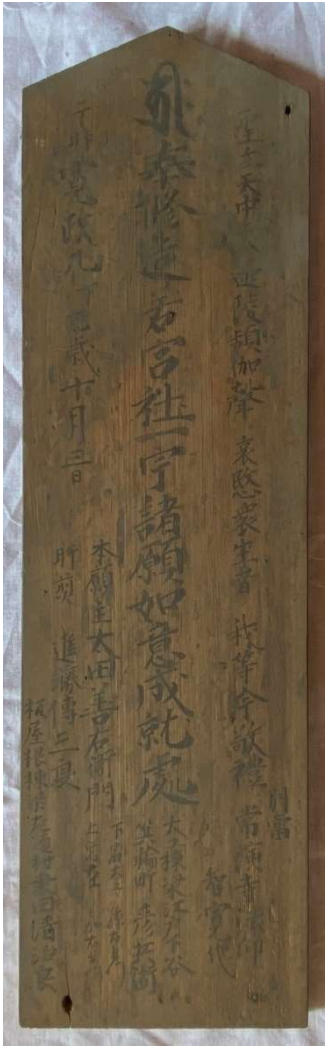
裏



請檀那現世安穩後生浄土之所仍意趣如件

棟札二 寛政九年 一七九七 総高46.8cm 上下巾13.5cm 肩高43.8cm ヒノキ材厚9mm

表



別當

聖主天中天迦陵頻伽聲 哀愍衆生者 我等今敬禮

常演寺法印

智寛代

梵キリク 奉修造若宮社一字諸願如意成就處 大工棟梁江戸下谷

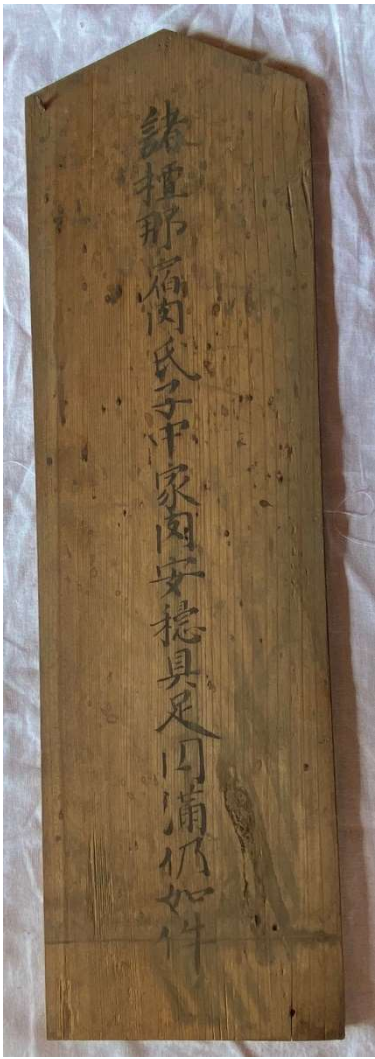
箕輪町 彦兵衛

于時寛政九丁巳歳十月三日 本願主太田善右衛門 下宿大工孫右衛門

肝煎 進藤傳三郎 上宿大工嘉右衛門

板屋根棟梁左 佐 須村栗田清次郎

裏



諸檀那宿内氏子中家内安穩具足円満仍如件

棟札三 嘉永元年 一八四八 総高73.0cm 肩高70.0cm 上巾12.0cm 下巾11.0cm ヒノキ材厚6mm

表



天下泰平

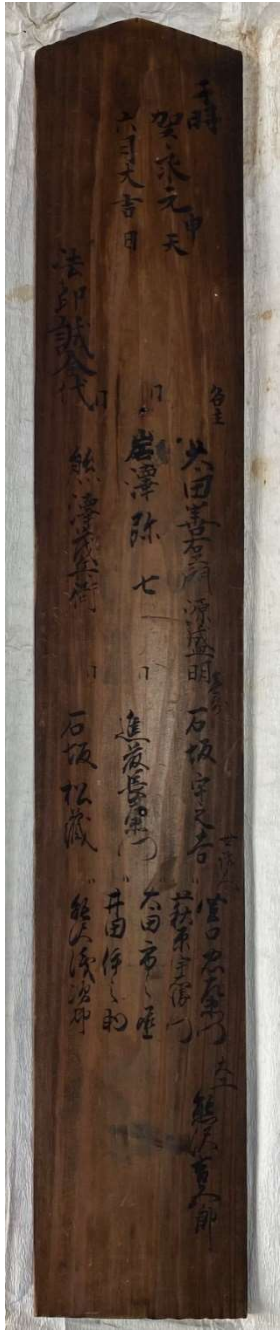
神向山

梵キリク 奉新造立八幡宮拜殿壹宇邑内安全如意祈攸

五穀成熟

常演寺

裏



于時

名主

年寄

世話人

大工

嘉永元年申天

太田善右門源盛明

石坂宇之吉

萱口忠左衛門

熊沢吉五郎

六月大吉日

同 岩澤弥七

同 進藤長左衛門

萩原宇右衛門

法印誠金代

同 熊澤茂兵衛

同 石坂松藏

太田市之亟

井田伊之助

熊沢浅次郎